

春期福音特別集会 第1回

キリストの中に (信)

—— ロマ書第8章1～17節 ——

1974年3月22日 (伊豆高原)

小池辰雄

指輪の宝石のスパークリング・ポイント エン・クリスト 霊と肉 キリストの御霊の中に御霊が来ているから現実になる サルクス・クリストス 無量寿・無量光 聖書の言の奥からくる霊風 矛盾構造 肉体が霊体化される あなただけが一切です 神と同質 主従・父子の関係 大気の中にあるがごとくにキリストの中でござる

【ロマ8:1～17】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。² キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。³ 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。⁴ これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。⁵ 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。⁶ 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。⁷ 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、⁸ また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。⁹ 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰ 若しキリスト汝らに在さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。¹¹ 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活し給わん。

¹² されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。¹³ 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて体の行為を殺さば活くべし。¹⁴ すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。¹⁵ 汝らは再び懼を懷くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。¹⁶ 御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。¹⁷ もし子たらば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストと



もに栄光を受けん為に、その苦難くるしみをも共に受くるに因る。

●指輪の宝石のスパークリング・ポイント

ローマ書は年代からいいますと、パウロの第三回伝道のときにコリントで書いたものらしい。マケドニヤ、アジアの人々から何か贈り物をもらって、それを携えてエルサレムの方に行こうという途中でコリントに寄つて、3か月ばかりいた。これは使徒行伝20章のところにちよつと出てます。そのときにこのローマ書を書いた。そして、ローマに行こうとしているところのファイベという姉妹——これはローマ書16章1節に書いてある——を紹介しながら、彼女に手紙を渡して、これを届けてくれということで、ローマ書は書かれまた送られたものとされています。大体紀元57、58年頃で、皇帝ネロのときですから、非常にキリスト教の迫害の強いときであつた。

ローマ教会はパウロ自身が建てたわけでもなからうと思いますが、異邦人も混じつていて、ユダヤ人もいるわけです。しかしながら、ローマはとにかく当時の世界帝国ローマの首都ですから、そこにパウロは乗り込むということはもちろん念願であつた。しかし、ローマを越えて更にイスパニヤの方まで行こうとしたのですが、それはついに果たせなかつた。ローマで殉教の死を遂げたというわけです。

ローマ書は新約聖書の、神学的な意味においては絶頂のところですよ。マルチン・ルターの宗教改革のときにやはりローマ書が彼の主題となつていた。また、20世紀においてはカール・バルトがローマ書について書いたことによつて、キリスト教のまた新しい神学の展開が起きた。宗教改革的な意味において、このローマ書というのは非常に大きな役割を果している。内村鑑三先生が無教会においてローマ書の講義をされた。私はそのときはまだ内村先生の集会には行つてませんけれども、私の兄貴は聞いた。この本は内村先生の第6巻で、全部ローマ書です。無教会においても内村先生のローマ書というのは大きな著作であるわけです。

ローマ書全16章のうちの第8章というのはまたその心臓部にあたるところで、内村先生がこれにも書いておられますけれども、

「もし聖書を指輪に例えるならばローマ書はその宝石であり、第八章はその宝石の輝点、スパークリング・ポイントである。」

と。これはドイツの敬虔派の最初の人のシュピーレンという人の言葉が引用されてある。それほどローマ書8章というのは大変なところですよ。これはとうてい実は三回位で及ぶようなところではない。その根本精神にひたつてみたいと思います。もちろん、節を追つてやるわけでも何でもありません。



●エン・クリスト

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

非常に断然たる言葉です。この一節だけで、もうこの集会がお終いになってしまうのではないかと思うくらいな大きな重い言葉です。「この故に」というのは、何もこのすぐ前の7章を受けたわけではないので、さんざん論じてきて、「そういうわけだから」と言つて、大きくつかんでいるようなわけです。普通は、5章あたりからくるのではないかといううなことが言われていますが、それはどうでもいい。あるいは、ある学者は7章6節の、

「**霊の新しきに従いて事^{つか}えることを得るなり**」

を受けていて、「この故に」との間に7章7節から25節は挿入されたのではないかといううなことを言ってます。どのみち、救いのことを言つて、十字架における贖いのこと、霊の事態と罪の事態の葛藤のことがこの7章では言われていて、人間はそれ自体としてはどうにも勝てないということがパウロの有名な嘆きで、

「²⁴噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救はん者は誰ぞ。」

という言葉がありますが、そこから、「この故に」と続くのではおかしい。もちろん、25節でひっくり返つて、

²⁵我らの主イエス・キリストに頼^よりて神に感謝す、然れば我みずから心にて

は神の律法につかえ、肉にては罪の法に事^{つか}うるなり。」(ロマ7・24、25)

と。そしてそれがすぐ論理的に、「この故に」とくるわけにいかないわけです。

要するに、キリストの救いにあずかつたから、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

と。この「キリスト・イエスに在る」という表現が有名な「エン・クリスト」という言い方です。

「エン・クリストー・イエスー」(キリスト・イエスの中に)

という。キリスト教は何ぞやと問われれば、もう「エン・クリスト」と答えてもいいくらいです。英語なら「イン・クライスト」、ドイツ語なら「イン・クリスト」です。

「キリストの中にある」

という、これは文字どおり「中に」なんです。キリストは神の中に、神の懷の中に。「神の懷にいる独り子」とヨハネ伝1章に書いてありますね。だから、キリストは神の中に。我々一人びとりは今度は、この「キリストの中に」です。「神―キリスト―我」の関係です。神・キリストの中に包まれてしまうのがこの「我」です。これがその「中に」ということです。

「キリストの中に入っている者は、罪せられることがない」ということ。



● 霊と肉

ローマ書7章5節に、

「⁵われら肉に在りしとき、律法に由れる罪の情は我らの肢体のうちに働きて、死のために実を結ばせたり。」

とある。この「肉に在りしとき」というのが「肉の中」なんです。「肉の中にあるとき」ということ。あるいは、「肉において」というのも同じ言い方です。コリント前書15章17節、「罪において」という。肉だとか、罪だとか、これもみな「中に」という言い方がある。このローマ書7章や8章にも「霊」という字と「肉」という字が非常にでています。「プニューマ」(霊)と「サルクス」(肉)です。

図を書く、「カルデア」(心)、「ヌース」(魂、ソウル)、「プシヘー」(意)、「ソーマ」(からだ)、「サルクス」(肉)。人間は、我々のこの存在の主体、頭、これは一番「プニューマ」(霊)の我^がです。「霊と心と身体」というときには、このカルデア(心)、ヌース(魂)、プシヘー(意)をひっくるめて全部、「心」と言うこともあります。「サルクス」(肉)というのは、なぜ私は外側に書いたかという、これは「身体」というのと「肉」というのは違うから。これを「肉体」なんて思っているはいかん。この全体をひっくるめて、ドイツ語でいうと、「ダス・イッヒ」「我」という。人間を、霊的な面と心の面と身体と、パウロが三つに分けて言っているところもあります。それが一つの「デア・ガンツェ・メンシュ」「全人」です。判断では、人間はこうやって分析して判断しますけれども、現実には渾然たるものです。どこがその霊で、どこが心かなんて、これを分析するわけにいかない。これが全人です。これが我という主我的に、神抜きにして——今の現代人はみんなそうです、現代人、近代人は——そういう主我的な我というものは、これが「肉」なんです。これが「サルクス」です。そういう我というものを主張しているのは、今の普通の「自主的」だとか「自由」だとか言っているのはみんな実は、この聖書的な表現からいいますと、「サルクス」「肉」なる我を直接肯定しているわけです。

ところが、「ト・プニューマ・ハギア」という「聖霊」がある。聖霊、神さま、キリスト、御霊。聖霊に一番直結するのがこの「プニューマ」「霊」なんです。

「われらの霊は御霊と共に」

なんてパウロは言っているでしょ。このプニューマが、聖霊を受けとって、聖霊を宿すことになる。と今度は、この主我が、主我的なものが抜けるわけです。そして、主体は、まさに主イエス・キリストが主になる。私たちがキリストのことを「主よ」と言うときには、自分が決して主ではない。こちらは「僕^{しもべ}」であります。

「父よ」と言うときは、こっちは「子」なんです。僕であり子である。奴隷と言っているはいかん。主—僕、父—子。そういう関係になって、それが自覚されるときに、この全体の我というもの、これは霊的な我です。これが本当に霊的人格、霊人なんです。霊の人。パウロが「内なる



人」とか「新しき人」とか「霊のひと」とか言うときには、これ全体が即ち、霊人。そして、存在的には「主の中に」です。これは主我ではない。これが「エン・クリスト」、キリストの中に入ってしまう。そうでないかぎりには、どんなにこれが良さそうにみえても、全体としては「肉」「サルクス」なんです。

私は内村先生のもものを読んだら、そのところの区別がちよつと内村先生はハッキリしてらっしゃらないので、おやおやと思つた。内村先生はこの「肉」をだいぶ肉情的な肉にとつてらっしゃる。それはいかん。肉情的な肉なんてものはこの中の一部分にすぎない。肉情そのものは何もわるくはない。それが本当に神においてあるというときには、性格が欲しまうわけです。人間の賜っている一切の性格、性質、傾向性は、ある意味においては欲望でも、それが自己中心であるときに、全部これが肉になるわけです。いわゆる禁欲主義ではないですから。全存在、霊肉ともに——「霊肉」というときにはこの肉は身体の方ですが——霊肉ともに贖われるというのは、そういう意味において完全に神のものとなるということです。キリストは私たちと同じようにこういう一切のものを備えてらっしゃる。それはすぐこのローマ書8章2節のところにでてきます。

「肉のうちに」「罪のうちに」

ということを行いました。コリント前書15章17節。それから、

「アダムのうちに」「旧き我の中に」

という。これはコリント前書15章22節。それから、

「律法の中に」

という言い方がある。それがガラテヤ書5章4節。律法即ち、律法の奴隷となつてしまつているときには、霊の中にないときには、「律法の中に」です。ところが、律法の中にあつてパウロはおおいに始めは得意になつていたけれども、それは大きな間違いだということが後で分かつたわけです。それから、

「世の中に」

もちろんある。エペソ書2章12節。そういったわけで、「の中に」ということです。

それから、ついでに言つておきますが、

「キリストと共に」(シン・クリスト)

という言い方がある。これはピリピ書1章23節、コリント後書13章4節。

それから、

「キリストによつて」(ディア・クリスト)

という言い方がある。これは相当かなり出てます。

「キリストによつて、その力によつて」

という。

それから、「中に」も、



「キリストの血の中に、血において」

という言い方がある。それから、

「キリストの名において」

という言い方がある。要するに、「キリストの血において」というのは、血は生命のあるところです。

「キリストの生命において」

というのと同じことです。それから

「名において」

というのも、キリストの名は本当に実力の世界ですから。要するに、それは

「キリストにおいて」(エン・クリスト)

に結局、帰するわけです。

●キリストの御霊の中に

ガラテヤ書3章26節、

「²³信仰の出来^{いできた}らぬ前^{さき}は、われら律法の下に守られて、後に顛れんとする信仰

の時まで閉じ籠められたり。²⁴かく信仰によりて我らの義とせられん為^{ため}に、

律法は我らをキリストに導く^{もりやく}守役となれり。²⁵されど信仰の出来^{いできた}りし後は、

我等もはや守役の下に居らず。²⁶汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、

みな神の子たり。」(ガラテヤ3・23～26)

この「信仰によりキリスト・イエスに在りて」は、

「キリスト・イエスに在る信仰により」

と訳した方がいい。キリストの中にあるところの信仰によって。「キリストに在る信仰」です。キリストの中にいなければ信が信でないというわけです、キリストをまだ対象的にしているうちは。

「神は一切のものに超越し、一切のものを貫き、一切のもののうちにある」

とパウロが言った。超在、貫在、内在ということが切っても切ることができない。なるほど、キリストは超絶の世界に居られます。キリストは超絶の世界にいらつしやるから、「キリストに在る」と言つたつて本当はどうにもならん。しかし、御霊が来ているわけです。

だから、「キリストに在つて」というのは、この聖霊が来てなければ、「キリストにある」ということは意味をなさないことは、今これから言いたいところなんです。

「イエス・キリストの中にある」

ということとは、イエス・キリストと共通のものを持つてなければ、「中にある」ということが言えない。でなければ、天界に行くよりかしようがないんだ。天界の、霊界のキリストの中にこれから入つて行くうたつて、これはどうにもならんでしょ。



この「イエス・キリストの中にある」というのは、キリストの御霊——「キリストの御霊」「神の御霊」とパウロはいろんなことを言うけれども——キリストの御霊が即ち、ペンテコステで全部に降臨しているわけだ。

満月が葉末の滴に、全部一つ一つに満月として宿る。60人いれば、60分の1が宿るのではない。みんな全的に宿る。全的に我々の中に聖霊が100%に宿ってくださる。即ち、御霊を受けて、この御霊によって共通しているから、ここで御霊を受けることによって、初めてキリストの中にあるということが霊的な現実となるわけです。

御霊がなくて、「キリストの中に」と言うのは普通のクリスチャンや観念クリスチャンがみんなやっているわけだ。言っていることは同じことだけれども、中味がちがう。それはただ比喩的に頭で思われて、中にいるかのごとく、アズ・イフなんだ。アズ・イフ・クリスチャンがたくさんいるわけだ。

ところが、この御霊がいらっしゃってからは、私たちはアズ・イフでなくなつて、それが現実になった。思われたる世界ではない。空にかかつている月を、こちらが水となつて宿す。水の中に月が宿るというようなのが御霊が来ている世界です。月影をここに宿さなければしょうがない。キリストの影をここに宿すには、御霊が来なければ。御霊は光としてここに臨んできて、そして、聖霊が宿る。

どこを通して宿つてきますか。十字架を通して宿してくれる。十字架によつて私は破られていて。砕かれている。十字架で破られ砕かれているから、そこに入ってくる。自分を人間的に整えている人間は受けとれない。立派な人ほど信仰に入りにくい。私みたいなダメな野郎が入るんです。

立派な人は——こういうことを言つてはわるいけれども——天野先生は立派なカント学者だよ。立派な先生だ。内村先生をもちろん尊敬してらっしゃいます。

「自分が今日あるは内村鑑三とカール・ヒルティによる」

と言っている。ヒルティと内村先生が彼の人格を形成する大事な契機となつた。だから、神を信じてはいらっしゃる。

「小池君、この十字架というのが僕はわからないよ。君のようなクリスチャンになりたいたくなくても、ダメだ」

と、正直に仰る。私はそこでもつて先生に一席やらない。ああいう立派な方は十字架がいらないとみえる。私みたいダメな野郎は十字架がなければいけないものだから。そういうことは先生はちゃんと頭では知っているんだ。自分は立派だからなんて言っているのではないけれどもね。哲学者というのは非常に論理的に整つてしまうから、なかなか信仰の世界に入れない。宗教的な人はみな非常に明暗の強い人が多い。天野先生の「内村鑑三論」というのは素晴らしいですよ。内村鑑三の矛盾構造をちゃんとつかまえているからね。



●御霊が来ているから現実になる

御霊が私たちの中に来てくださったから、この中に受けとったから、

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

ということが言える。パウロがなぜ、「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」なんてことを言ったか。それは形容詞で言っているのではない。現実なんです。なぜ、それが現実かというと、御霊が来ているから現実なんです。だから、「我れキリストのうちに」と言おうが、「キリストわがうちに」と言おうが一向差し支えない。

とにかく、この「中」という、「エン」というのは——「エン」は「円」に通ずる——円現するわけだ。円の中に入っていく。私たちは中に入ると自分自身がだんだん円形に、球形になる。人間が球形になる。信仰はそういう「中」という世界に入るまでは決して本ものにならない。どんなに仰いだって。だから、「信仰」の「仰」の字は躓きになる。信じ仰いでばかりいるから。

仏教の世界でもみんなそうですよ。申し上げているとおり、

「南無といえば阿弥陀来にけりこの一つ身を我とはいわん仏とはいわん」

という。我と仏が一つになっている。

「我を見し者は父を見しなり」

「我と父とは一つなり」

という。みんなこれが中の世界です。中の世界に来るまでは絶対に本ものでない。まあ、うそつぱちとは言わないけれども、観念なんです。その「中」も、思われた「中」ではどうにもならない。現実にならなくては。これはどうしても聖霊ということになる。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

「キリスト・イエスに在る者」というのは、

「キリスト・イエスの御霊の中にある者」

あるいは、

「御霊を宿す者」

と言つてもいい。それをパウロはそんな分析したものの言い方をしない。

「キリスト・イエスの中に在る」

と言うと、バツとその中にもう彼は入ってしまうんだ。

「キリスト・イエスに在る者はもう罪せられることなし」

と。それはそうですよ。その中にあるから、サタンはどうにもしようがない。

一体、「罪」とは何ですか。「神—キリスト—我」のこの垂直の関係が切れてしまっていることが罪なんだ。宗教的に罪というのはもうハッキリそのことだ。関係が切れている。この頃は「断絶、断絶」なんて言うけれども、この断絶しているのが罪なんです。どんなにそれ自体が立派な聖人君子であろうとも——それは道徳的には立派な方ですよ——けれど



も、宗教の世界では、福音的にはそれは罪びとなんです。

ダンテが、どうですか、あの立派なソクラテスや何かを地獄の一角に入れたではないですか。あれは私に言わせれば、非常に素晴らしい意味がある。地獄の一角にあんな素晴らしいギリシアの詩人や哲人がいる。これはやはり神との関係を彼らは持つていなかったけれども、彼らは立派だから、地獄の中に特別に天国みたいな所を造ろうというわけで、やったわけだけでも。

しかしやはり、地獄は地獄なんだ。これは宗教的角度からいうとやはり罪的存在だ。しかし、それはちよつと、ある意味においては酷だね。まだキリストとは時代的にもちがう。プラトンなんていうのは、哲学の世界で非常に宗教的な世界に入っていますから、ちよつと困るけれども。しかし、とにかくそういうことで、神との関係が切れていることが、これが「罪」ということです。それからいろんな罪の枝葉が生ずるだけのなしです。

ところが、この直接関係がなかなかできないわけです。それを執り成したのが、この真ん中のキリストですよ。これは仲保者だから。執り成しの人です。ヨブ記でヨブが、

「何か自分を執り成すものがあるはずだ」

と言っている。これを通るためには、キリストというものにぶつかって、その前に降参するまでは、この線は通ってこない。イエスにぶつかって、

「もう、これは参りました」

と言って平伏したら、この線が出てくる。平伏すまでは絶対にこの線は出てこない。

●サルクス・クリストス

3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、

「肉によりて」というのは、「肉のために」という意味です。肉のために弱くなった律法。どういうことかというのと、「肉」というのは即ち自己中心です。律法は本当は聖なるものにして、律法を本当に守れば永遠に生きるわけです。けれども、そのようにして律法を守った者はユダヤの歴史には一人もない。キリストだけがそれをやった。内側から守った。モーセの十戒を本当につかまえたのはキリストの山上の垂訓ですよ。本当は十戒の中にこの福音が隠れているんだ。

「汝、殺すなかれ」

ではない。

「汝は殺人しない」

という言葉なんだ、本当は。

「汝は殺人しない。なんとなれば、私が神であるから。私は神だから、お前はとも殺人なんかできるはずがない」

と言って、神さまの方から信じ込んでいるのが律法の根本精神です。それを本当に受けと



ったのはイエスだけです。ユダヤ人はみな受けとりそこなった。「殺すべからず」という、それから派生するところの禁止の命令になってしまった。ところが、そう言われると、殺す。大体、カイン、アベルからしてもう殺人が始まっている。肉のために律法の力が弱くなつてしまった。自己中心だから。律法は本当は生かす力であつたのが、生かす力がなくなつて弱くなつてしまったという意味です。

3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、

それはキリストに在つてね。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。

と、実にややっこしい言い方をしていますが。要するに、キリストは私たちと同じ弱き肉の形をとった。これは形をとったんです。彼は肉ではない。我々と同じように一人のこういつた構造をもつた人間として現れた。即ち、「サルクス」となった。「サルクス・クリストス」即ち、肉となった。

「肉」という言葉をただ一義的にばかり解釈しては困る。そういった「自然的な人間」のことをまた肉と言つてますから。それから今度は、それを信仰的な角度からいうと、「自己本位」のときにこれをまた肉と言っている。そういった自然的人間としての肉。罪の肉という姿でもつて、罪のために、罪を何とか処分するためにつかわした。そして、肉において罪を定めたまえりと。

キリストは肉の形をとったけれども、自己中心としての肉とはならなかった。自然的人間として現れて、我々と同じ喜怒哀楽を全部、感情も持つていらつしやつた。非常に危機的存在ですよ、その点では。うっかりすると、サタンにやつつけられる。「わが意^{こころ}」と言つてわが意を立てたら、こつちのサルクスに、主我的になるから。

「わが意^{こころ}ではありません、あなたの意です。聖なるあなたの意です」

と言つて、いつも祈りをもつてキリストは神に絶対依存していたわけだ。絶対依存者です。肉でありながら実は彼は霊である。霊的人格、御霊の人です。もうこれは、ヨルダンであれだけの聖霊のバプテスマを受けておられるから。本来、霊的な素質を持つてらつしやつたけれども、ただ素質を持つているからといって、それでいい気になつていたわけではない。「肉において罪を定めたまえり」というのは十字架^{おき}のことを言うんです。「罪のためにつかわす」というでしょ。この肉の形において罪を定めたまえりと。

4 これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義^{まこと}の完^{おきて}うせられん為なり。

今度は、霊の、御霊におけるところのこの霊において、御霊において従う。「霊に従いて」というのは、御霊に従つて歩む我らの中に律法の義の全うせられんためなりと。「律法の義」というのは、律法の義については、誰でもが手放しには律法の義を全うすることはできない。即ち、律法は聖にしてまた義なるものです。神さまの意志を発動しているものですから。



それを本当に受けとるためには神の霊がなければ、この律法を全うすることができないから、パウロはそう言ったわけです。

⁶ 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。

即ち、自我中心であつては、これはもう死である。キリスト中心、御霊中心におけるところは即ち、霊の念は生命なり、平安なりと。ここにも特に「平安」と訳してあるのは大変結構です。これは平和ではない。平安です。同じギリシア語ですけれども。即ち、聖霊を宿しているこの縦の関係がハッキリ立っているのが平安で、人間との関係がこれによって成り立つのが平和である。平安がないところに平和はない。

⁷ 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、⁸ ま
た肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。

これはそのとおりです。

⁹ 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

「神の御霊」と言おうが、「キリストの御霊」と言おうが、ただ「聖霊」と言おうが、同じことです。神の御霊が、聖霊がなんじらの中に宿り給わば、汝らは肉にいないで、即ち、自己中心とはならないで、霊に居る。即ち、神中心、キリスト中心にある。これでもって非常にハッキリするわけです。

普通の人とはどんなにそれが良さそうにみえても、いわゆる理想主義であろうと、浪漫主義であろうと、みんなそういった人間の側から求めている角度は全部、肉になってしまふ。それ自身は悪くはないんですよ、ちつとも。悪くはないけれども、宗教的な角度からいうと、それは肉なんです。神に栄光を帰しているのではない。自己の栄え、人間的な栄光になっているわけです。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

非常にハッキリしている。キリストの御霊なき者、キリストの御霊を宿さざる者はキリストに属する者ではない。クリスチャンでないと。かくも御霊のことをパウロがこのローマ書8章で言っているか。とにかく、新約聖書の一番の心臓部にあたるところでパウロがこのようにハッキリ言った。

今、この第一回の集会は、要するに御霊と霊のことを私たちはここでしつかりと受けとるわけです。霊人、霊的人格。人という字は霊止、霊が止まると書く。私は大言海でこれを発見したときに本当にうれしかった。「ひと」という字は本来、霊が止まると書く。さすがに昔の人は凄いなと思った。神霊が止まっている。もともと神の似姿に造られている。しかし、手放しでは神に直結できなかった。

あるところを突破しなくてはいかん。それが聖霊のバプテスマと言われる。パウロは真四角な仕方がない野郎だから、キリストがとうとう、「お前の四角はダメだ」と、ぶち破った。「おのが義」というやつをぶち破る。そして今度は、別の四角になる。彼は義の好きな男で



すから。それで、

「自分の義ではダメだ、キリストの義だ」

と言った。この聖霊の世界は、四角であろうが、三角であろうが、丸であろうが、星の形であろうが、何でもいい。どれもこれも本ものに現象していきますから。神に直結できなかったところにキリストの贖いが絶対に必要としたわけだ。即ち、「全人」ということです。

●無量寿・無量光

仏教の方に

「アミッター、アミッター」（「無量寿、無量光」）

という言葉がある。「アミッター」というのは無量寿のこと。「アミッター」は無量光のこと。「無量寿・無量光」とかいうような測り知ることができない永遠の生命、測り知ることのできないもの、凄く一切を遍照するところの光です。やはり仏の如来の世界が凄くからこういう言葉が出てくる。キリスト教で、福音でこの「無量寿・無量光」「アミッター・アミッター」というような内容はいかにして可能かといえば、この御霊がくれば、絶対それに負けない素晴らしいところへくるわけだ。だから、霊人は、御霊の人はまさにこの「アミッター・アミッター」なんだ。「無量寿・無量光」を自分の中に宿しているわけだ。

そういう霊人、^{ひと}霊止。このことをなぜ、今のクリスチャンが、聖書の「研究、研究」なんて言って、神学者がただ神学的に解釈ばかりして、ちっともそのことを自分たちの現実としないところに大きな欠陥がある。それをつつこんで行ったのが何といつても手島（手島郁郎 1910～1973）さんだ。手島さんと私とでそれをやったら、無教会にすっかり嫌われて、アウトサイダー（部外者）にされた。そしたら、私たちは使徒たちのインサンダー（内部の者）になった。だから、私は痛くも痒くもない。手島さんは、しかし、だいぶ無教会を尊重していらつしやるようだが、私は手島さんほど無教会を尊重しない。「無教会主義」なんて言って、イズム化するから。

内村先生のローマ書の註解は素晴らしいけれども、やっぱり足りない。内村先生が聖霊のことを仰っていても、やっぱり観念にズレている。先生は聖霊の体験がないとは私は言わないけれども、どうしても、そこところにズレがきている。内村先生は素晴らしい才能の方だから、みんなそれに酔ってしまふ。酔ってしまったのはダメだよ、変な酔い方をしたつて。私は生意気なことを言うようだけれども、そこは分かるんです。先生は、感覚はなかなか直観力のするどい方だから、お分かりになる。内村先生はたまたま霊的な伝道者にぶつかり、「ああ、素晴らしいな」と言って驚かれて、「ああいう伝道者ならいい」というようなことを言われるでしょ。今、いくら学問的に無教会が前進していたって、それはダメだよ。パウロさんたちのこの世界に本当に自分でつつこんで来ないから。あなた方は、とにかく、深く入らなくてはダメだよ。



●聖書の言の奥からくる霊風

とにかく、第一回はどこまでも、「中」という世界を徹底的に受けとっていただきたいわけです。私たちは空気の中にいる。そして、空気を吸っている。また、空気は私たちの身体の中に入ってくる。そして、これを浄化して身体の中を30秒くらいでグルグル回っているらしい。それで血がきれいにされている。空気がなくては、空気に包まれ空気に浸透されなくては、我々の肉体は、この「ソーマ」(体)は生きていられない。

ところが、我々の「プニューマ」(霊)は、あるいは「ヌース」(魂)だとか「カルディア」(心)だとか「プシヘー」(意)だとか、そういうのはもうひとつ別な空気を必要としている。霊気を、天津風あまつかぜを、霊風を必要としている。それを本当に瞑想して、キリストの霊気をどうやって受けとるか。霊言です。聖書を読んですすよ、聖書は霊言ですから。聖書を読んで、この言の奥からくるところの響きを受けとる。それは霊風なんです、天津風なんです。なぜ、この聖書が大事かというと、この聖書の言の奥からくるところの——ギリシア語でもヘブライ語でも日本語でも何語でもかまわない——それを通してその奥からくるところの神言、霊言というものを——根源の言、「ウルヴォルト」という——これを受けとると、この天津風がグーッとくるわけです。だから、

「わが言は霊なり生命いのちなり」

とキリストが言われた。

「意味ではないよ。私の言を読んだら、直ちにその中に入らなくては。その現実の中に全存在を投げ込まなくては」

と。パウロはそこからのことを言っている。決して、「について、に関して」説明しているのではない。パウロはそこからのことを言って、グーッと嵐のように波のように真理が押し寄せてくる。それをどんどん言うから、どんどんそれを書かせている。多分、このローマ書だって、口授して書かせたようなものでしょ。驚くべきものです。これは決して頭で整えてものを言っているのではない。だからもし、

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」

と書いてあったら、あなた方はこれをどう読むんですか。

「キリストの御霊あるがゆえにキリストに属している」

と読まなくてはいかん。「無きものは属するものあらず」なんて、パウロはちよつと否定的な、ひっくり返したものの言い方をしている。もつと直結して、パウロの言のもうひとつ奥の響きは何かと。

「お前はキリストの御霊を持つているから、キリストのものだよ」

と、そう読まなくてはいかん。だから、私は大胆な訳をしるという。それはもう訳ではないんだ、ひとつの創作になる。そういうように、聖書は楽しくてしょうがない。「はて、ギリシア語はどうだったろうか。そう読んでいいんだろうか、わるいんだろうか」と、そん



なことを思う必要はない。ギリシア語を知らなくたって大丈夫だ。もうひとつ奥を読んでしまおう。ギリシア語を勉強するなど言うのではないよ。ギリシア語やヘブライ語は、暇のある人や語学の才のある人はやってください。けれども、それがどうかと言うのではないと言っている。

●矛盾構造

¹⁰若し^もキリスト汝らに^{いま}在さば

即ち、御霊が来たらば、あなた方は本当の権威が出てくる。

「御霊を受けた者にはもはや教える必要がない」

とヨハネ書簡に書いてある。だから、君たちに教えるのはそのうちに僕はもうやめようと思っている。そうすると、私は非常に楽でいいよな。来年あたりからもう集会は解散。みんな一人ひとりやれよな。そうしたら、私は山に籠ってしまおう(笑)。だから、今度のこの春の集会で、もう春の集会はお終い。

¹⁰若し^もキリスト汝らに^{いま}在さば^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。

「キリスト汝らに在まさば」とパウロはさんざん言っているね。

「キリストがお前たちの中にいるなら」

と。パウロはこの8章で、「中」の世界でその中からものを言っているから、たまらんですよ。^{からだ}「体は罪によりて死にたる者」という。パウロの言葉の使い方にはいろんな段階があるので困るけれども。キリストの中にいれば、体は本当は根源的には罪の中にはないんですよ。全存在としては体まで贖われなければならないんだけど、しかし、とかく人間の体は——我々がどんなに救われていても、現実には罪びとにすぎないから、そこで体は罪の奴隷みたいになっている面があるから——今に朽ちてしまおうと。それは相対的現実としてはそういうところがあるから仕方がない。

^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。

体は死にたる者なれども、霊は——新しく生きた、賜ったところの霊は——「義によりて」とは、

「義なるがゆえに生命にあるのだ」

という。人間は全存在として、我々は死にいたるまで罪びとにすぎない。また、全存在として死にいたるまで、もうキリストを受けとったかぎりには義人であるんです。

「罪びとであり、義人である」

という絶対矛盾の構造になっている。矛盾構造です。この罪のゆえに我々は死なざるをえない。

「血気の体あり、霊の体あり」



とパウロが言っているでしょ。即ち、血気の体はそっちの方で死んでいくけれども、霊の体は新しく甦っていくんだと。コリント前書15章で言っているとおりです。

御霊の信仰的真理というものは、ひとつのある矛盾構造を持っているし、割り切れないものを持っている。これは仕方がないんです、現実というものは。しかしながら、それにもかかわらず、もうひとつ奥の世界ではそいつに全存在的に勝っていく。それはどんなに滅びても勝っていくんです。私たちは、肉体は滅んでいっても勝っていく。そして、旧き我としてはどこまでも平伏していかなくてはいかんし、新しき我はどこまでも本当の權威をそこで持っている。と分析的に言いながらも、しかも、いつも私たちは全存在として平伏していかなくてはいかん。そうするとまた、全存在として大きな權威をもつて、あの使徒行伝のペテロ、パウロのごときことができるわけです。

●肉体が霊体化される

11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活し給わん。

「この肉体までも活かされることがある」

と。それは、しかしながら、彼らの現実はやがて、今、終末が間近にきているから、世の終りがきたときはすぐ天界に贖われて行ってしまうと、「空中に上げられる」というようなことまでテサロニケ書では言ってますね。だけれども、一応、

「私たちの死ぬべき体をも活かしたまわん」

とここで言っている。それは前のことと矛盾しているでしょ。

「体は罪によりて死にたる者なれど」

と言うけれども、今度は、

「汝らの死ぬべき体をも活かす」

と言う。贖われたら、それだけの復活の生命をたまわる。即ち、肉体が霊体化される。

キリストの体はそうですからね。キリストの肉体は霊化されてしまつて、肉体的な現象は全部そこで、滅びたのではなくて、変質変貌してしまつた。霊化してしまつたんです。あれがキリストの驚くべき復活体ですから。それと同じようになるという。けれども、歴史的には私たちの相対的現実としてはどこまでも肉体は一遍死ななくてはならない。しかし、それにもかかわらず、霊体は与えられていく。魂は裸ではないぞというわけです。

12 されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて

活くべきにあらず。13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。

それはもうハッキリ、自我本位であつたら死ぬぞと。「肉に従う」というのはそういうことです。



もし霊によりてからだ体の行為を殺さばおこない活くべし。

今度はまた、そういう言い方をしているね。キリストの御霊です。もし霊によりて、罪の支配しているところの体の——罪が支配しているから体自身が悪いのではない。肉体が悪いのではない。とかく罪の奴隷になるのがこの肉体であるものだから——罪が支配している体の行為を殺さば、即ち、自己、本位のそういった行為を殺さば生くべし、ということです。肉体そのものは重大な問題ではない。肉体というのは罪のひとつの契機となつて、誘惑の契機となるから、そう言っている。体を何か主體的に考えてはいかん。

「罪の支配の下にあるところの体を殺さば生くべし」

と。ということは、自分の中の自我本位なものととの戦いです。即ち、克己、己おのれに克かつという。己というのは、生まれつきの我、旧き我。そいつと戦う。この旧き我がとかくこの肉体をひとつの契機としていろんな欲望にかられるから。要するに、中心は旧き私の意志です。自己の意志、この意志に打ち勝つこと。意志でも感情でもいいですよ。この知情意。悪巧みもあるさ。そういった、

「生まれつきの我というものを、知情意をもふくめて、そいつを殺せ。そいつと戦え」

ということ。それはもうハッキリそうだ。己と戦うことは最大の戦いなんだ。これは手放しで戦ったら負ける。一時的には勝つけれども。どんなに勝ったようであっても、それは本当の勝利ではない。本当の勝利のためには上からこの力が来なければダメです。

●あなただけが一切です

イエス・キリスト自身がそうだったんだから。

「なぜ、私を善いと言うか。善きものは神のほかはない」

なんて言っているんだから。キリストは我々の罪の肉の弱さを全部背負って、

「自分はダメだ」

と、キリスト自身がそう言っている。

「我は何ごともなしあたわず。父がさせている。自分は何も言えない。父が言

わせている。ちっとも自分は善くはない。父が善いんだ」

と言って、肉としての我というもの、自然人としての我というものを彼は打ち消しているんです。それだから私は「無者」と言っている。自分を何ものもしない。己に勝とうと思つて、己を立てているうちは勝てない。ところが、キリストは己というものを何ものとしません。己を何ものもしないというところに勝利の秘訣がある。これが勝利の秘訣なんだ。

「このヤロー」と思つて自分を相手にしていたらかえつて苦しくなる。ところが、

「こんなものはや問題でない」

と言つて自分を否定してかかる。そうすると、それは勝利へのひとつのきつかけになる。



それで勝つわけではないですよ。

「自分を何ものともしない。あなただけが一切です」

と、こうくるわけです。

「汝のみです」

と。そうすると、これがやってくる。だから、これがさっきの無量寿です。無限無量となる。そこに聖霊が臨んでくる。「自分を何ものともしない」というのは、私たちは手放しではできないところに十字架がある。

「十字架でお前はもはや葬ってしまつて、何ものでもない。お前の自我は全部私が引き受けたぞ」

というのがこのキリストの十字架ですから。自我が死に、

「我れキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言っているのはそのことです。

「我れキリストと共に十字架せられたり。我れもはや生くるにあらず」

私は無者なりと。

「キリストわがうちにありて生くるなり」

というのは、

「御霊のキリストがわがうちに在りて生くるなり」

ということ。ガラテヤ書2章20節がまさにこれです。これはもう私は何回言うかしらんけれども、言いながら楽しくてしょうがない。

相対的な私なんかどうだっていい。そんなものは問題でない。もう根底からすつ飛ばされているんだから。そうしたら、キリストの御霊が来てくださる。それだから、我々は無限無量となる。このイエス・キリストがかくもわがうちに霊として臨んでくださる。

「全世界といえども我れ行かん」

というのがここにある。この恩寵を否定することはキリストを否定することだ。人間の側の一切の何ものでもない。いろんなことで何だかんだとやっているけれども、集会にきて、ここで本当にそいつを受けとって進んでいく。あなた方、若い方はいろんな問題でゴタゴタやっているね。いいんだよ、どうでも。「帰りきたれ」と。キリストのところへ帰ってくれば、「誰々の生まれつきの性格がどうで、才能がどうで、環境がどうで」なんて、そんなことはどうでもいい。ここへくれば全部すつ飛んでしまふ。そうして、「お互いに行きましよう」ということになる。「お互いに行きましよう」の話は明日くらいするけれども、今日とはにかく、中へ入らなくていいかん。いいですか。

●神と同質

14 すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。



即ち、父なる神と同質になる。同質になるから子なんです。「ホモウジオス」(同質)です。アタナシウスとアリウスとの例の有名な神学上の論争がある。

「キリストは神の相似性、似ているものか。いや、同質性か」

と言って争ったわけだ。「同質である」とアタナシウスが言ったのがついに勝った。アリウス派というのは、「キリストは神に似ている」と言う。「ホモイウジオス」(相似性)の方だ。「ホモウジオス」(同質性)の方は「似ている」ではなくて、「同質である」ということ。ただ「イ」ひとつを争ったという。

「神と同質」ということ。私は質の問題が好きだ。量ではない。質です。私みたいなのは小さい男だよ。しかし、パウロと同質なんだ。だから、私は「パウロさん」と言うんだ。小池の野郎は生意気だなんてね(笑)。けれども、これは御霊が一つなんだから、パウロさんと同じだ。同質なんだ。イエスは神さまのことを「父よ」となぜ言うかというところ、この神霊をいただいているから。同質だからです。親子というのはみんな血が繋がっている。親子というのはやはりそこに同質性があるわけだ。「普段は喧嘩なんかしても、やっぱり親子だ」なんて言う。そういう同質性ということですよ。

私たちクリスチャンが、御霊が本当にきてたら、これは同質なんです。それでなければ「兄弟姉妹」なんて言えない。「兄弟姉妹」なんて口ばかり言ったってダメだ。かげでは「あのヤロー」なんて言ってたなら(笑)。本当に御霊が来ていれば——どこの教会であろうと、無教会であろうと、カトリックであろうと、いいですよ——握手ができなくては。それは御霊が来れば本当の愛だ。聖霊の愛なんだ。御霊が来て愛がなかったら、そんな御霊は、私は決して信用しない。本当に兄弟姉妹というのは、カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、何であろうと、教会であろうと、無教会であろうと、一向差し支えない。仏教徒であろうと、フィフィ教であろうと、何でもかまいやしない。とにかく、この愛が万人を兄弟姉妹としてしまう。聖霊の愛は、何といっても、凄いことです。とにかく、これが同質ということですよ。

15……子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。

御霊がきていると、本当に「お父さま」と呼べる。キリストが、

「天にいます我らの父よと祈れ」

と。主の祈りに書いてあるから、教会の連中はよく知っているよ。「主の祈り」をドイツの教会でみんなやっているんだよ。私は黙っていたら、「なぜ、黙っているか」と聞くから、

「私はそんなオウム返しみたいな祈りをしたくない。そのかわり、本当に祈るとき

には、主の祈りのどこかは出てくるよ」

と、牧師に言っちゃった。全部は出てこないが、どこか出てくる。そのとき、本当に心にあるのが出てくるだけの人はなしだと。



●主従・父子の関係

「僕」のときは、相手は「主」なんです。旧約聖書で「ヤーヴェー」のことを「主」、「デア・ヘル」(独)、「ロード」(英)と書いてある。イスラエルではこの主従の関係が強いから。「エホバの僕」という。即ち、使命的には主なる神の命令にこれ従う。それが僕です。

「御意をなされたまへ」

という祈りは僕なんだ。

「われ父のうちに、父わがうちに」

というのは父子の関係です。子であるという、存在的に同質であるということと、僕という使命的存在です。父であり主である。もちろん霊的な父であり霊的な主ですけれども。私たちは、御霊がきたら、本当に「アバ」「父よ」「お父さん」と祈っていいよ。けれども、私はこの頃、「主よ」「主さま」とばかり祈っている。「主さま」と祈っても、その背後には「お父さま」がある。「父よ」と祈っても、その前面には「主さま」があるわけです。どつちを祈ったっていい。ただ、私たちのじかじかの救い主はキリストだから、つい私は「主さま」と祈るのだけでも。

15 汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。 16 御霊みずから我

らの霊とともに我らが神の子たることを証す。

もうハッキリそのとおりです。即ち、「聖霊」「プニニューマ・ハギア」が我らの霊とともに我らが神の子たることを証する。御霊を受けるまでは本当に神の子というわけにはいかない。新たに神の子となるからね。キリストは特別な子です。キリストだけは特別な独り子で、我々とはちがう。だから、もうこの地上にあつて、既に天界なんです。

16 御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。 17 もし子たら

ば世嗣たらん、

それはもう世継ぎだ。世継ぎというのは要するに神の国を継ぐわけだ。新天新地、歴史の終りにくるところの神の国を継ぐものはこのキリストを本当に受けた者だと。

神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。

世継ぎであるから、いくらでも他の人たちを世継ぎの世界へ入れることを使命としている。

これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。

十字架です。神の世界の栄光への道はこの世の中を、苦難を通る。神に背いてサタンの配下になるのが「世」という。「世」というのは暗黒の気持がある。この世において本当にキリストに在って生きる人は必ず十字架を負う。何らかの意味において十字架を負う。それを負ってなかったら、それは本当に生きていくわけではない。その人その人においてみんなちがうんです、この十字架は。いいですよ。とにかく、十字架を負う責任がある。十字架を負わなかったら、天国に、神の国に行けない。



「その栄光に比ぶべきものあらず」

とパウロが言った。自己との戦いがまず戦いだ。それから、いろいろな世の中との戦いがある。神にくみしようと思ったら、どうしてもそうならざるをえない。ただ、戦いの戦い方はもちろんあるよ。あるときは、パウロが言っているとおり、

「弱き者には弱き者となり、ユダヤ人にはユダヤ人となり、いかにもしてこれを救わんために」

と。これはローマ書9章以下に出ている。ローマ書9章以下にユダヤ人の救いのことまでパウロは約束して書いているのに、今のユダヤ人たちは、どうしてもこのことだけは受けとらないか。「パウロは一番けしからん」と言っているらしい。「パウロは一番けしからん」と言っているうちはダメなんだ。「パウロさんは、ユダヤ人中のユダヤ人がこんなにも変わったか」と言って、彼らがひっくり返ったら、もうえらいことになる。

●大気の中にあるがごとくにキリストの中でげん

この8章1節から17節までは要するに、

「キリスト者は御霊をうちに宿して、キリストの中に在るという者である」

ということ。このことをローマ書8章の前半ほど徹底的に言っているところはない。それはどこまでも深い祈りを必要とする。祈りで自分を投入すること。祈りはキリストの中に己を投入することである。キリストは私たちを大気のごとくに包んでいる。担っている。このことに気がつくことです。ただこの一事です。

何も集会に限ったことではない。電車の中であろうと、台所であろうと、便所の中であろうと、どこであろうと、パツと気がついたら、キリストの中でござると。大気の中にあるがごとくに。この瞑想が、自覚が本当になったら、一切の問題はすっ飛んで行ってしまう。問題はあるがままで乗り越えてしまう。問題はあるがままで、根源的解決の中に入っていく。運命・環境はどうであつてもいい。そこで直ちにそこが本当の天国になる。そして逆に、運命・環境を自分が変えていくことができる。

この「中」という世界の自覚は非常に生命的である。本当に内側から光がさす。本当の力がある。権威が出てくる。これは権力ではないですよ、権威です。使徒行伝を読んでごらん下さい。ペテロ、パウロがいかにこの中であつて動いているか。牢屋の中に在ったつて牢屋の中にいるのではない。キリストの中にいる。鎖が解けてしまったりする。困ったと思ったり、あるいは、これはと思ったり、あるいは非常に悲観したり、くたびれたり、どんなときであろうとも、中の世界にすぐ入れる。それはこの祈りなんです。言葉の祈りではない。自分をキリストの中に投げ入れる。あるいは、キリストにちゃんと担われているということに気がつくだけです。要するにそれはキリストの愛の中です。御霊は愛の霊ですから。

